

「2025年ワーキング・スタディ・ツアー」に参加して

連合本部 北 野 眞 一

C S A事務局の山崎事務局長、砂長事務局次長をはじめ、視察の準備・調整頂いた関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。そして、本視察ツアーの参加を遠慮していた私を強引に参加登録してくれた連合本部・杉山局長に遅ればせながら感謝申し上げたいと思います。（コプチャイライラーイ）

出発前夜は片っ端から衣類や靴、そして日用品などをスーツケースにぶっこみ、ツアーの団長として何をしたらいいのか不安な気持ちでしたが、事務局や現地スタッフの配慮やすばらしい参加者に支えられ、本当に充実した有意義な7日間でした。

日本を離れ、タイ・バンコクを経由しラオス・ビエンチャンに到着。想定していた暑さはなく、過ごしやすい気温・天気にも恵まれました。そして、日本に帰国するまで参加者の疲労軽減も含め考え尽くされた行程により、誰一人体調を崩すことなく全日程を無事終了できたことは、事務局お二人のご尽力であり重ねて感謝を申し上げます。

はじめてのラオス・ビエンチャンの第一印象は、通信会社出身の悪癖なのか、電柱に幾重にも張られたケーブルと鉄塔に無造作に設置された携帯アンテナがとても気になりましたが、携帯電話の通信品質は意外と悪くないと感じました。そして日本車（特にトヨタ車のピックアップ）も目立ったが、中国メーカーの自動車（EV車）が多いなあと感じたことです。後に在ラオス日本国大使館で聞いた対中国債務残高と投資を聞いて納得した次第です。



今回の視察でC S Aがルアンパバーン・トンパンビライ村に12番目に建設した小学校（引渡2002年）を訪問することを楽しみにしていました。ラオスの北部に位置するルアンパバーンはラオスの旧古都で世界遺産に登録され僧侶の托鉢で有名ですが、小学校まで整備されていない道を約2時間かけて移動。子どもたちは休み中にも関わらず、民族衣装（巻きスカート・シン）を着て歓迎してもらい、短い時間であったが「折り紙」や「サッカー」で交流。子どもたちの屈託のない笑顔は印象的ではあったが、義務教育における進学・退学率の現状や教員の能力・人数の不足、とりわけ教育分野における国家予算の低さは大きな課題と感じました。あらためてC S A事業の継続の必要性和役割を認識しました。しかし、一方で「ラオス国民の依存度が大きな課題」と支援事業に関わっている山崎事務局長や訪問した難民を助ける会（AAR）・岡山さんの話を聞いて、なんとも論じ難い課題と感じたところです。

また、今回の視察ツアーで現地ラオスでのAARと連合と関わりの深い国際労働財団（JILAF）・タイ事務所の支援事業を知ることができたことは有意義でありました。それぞれがラオスやタイに寄り添い、産業や人材の育成などに力を注がれていることを実感できました。そして、在タイ日本国大使館の連合アタッシェ・鈴木書記官（自動車総連）が現地で奮闘されている姿を見られたことは何よりでした。

紙幅の関係もあり書き足りない感もありますが、「連合・愛のカンパ」を通じて、CSAの事業を支援している大きな意義とCSAの先達の「平和・人権」そして「包摂」の想いが脈々とつながっていることを強く感じることができました。今、世界が「分断と対立」を深める中、世界の課題に目を向け、民間の力が広がることを期待したいと思いますし、連合として、平和で安定した社会・暮らしの実現をめざして、地球規模での“絆づくり”を進めていきたいと思います。

結びに本ツアーを通じて出会った縁を大事にし、本ツアーのメンバーとの再会を祈念しています。（ポップカンマイ！）

スズケングループ労働組合連合会 佐 藤 郷

CSAが取り組む「小学校建設・補修事業」と「教育支援事業」を中心としたワーキングツアーに参加させていただいたことに、まずもって感謝申し上げます。この視察を通じて感じたCSAの意義および今後の教育支援について、感じた点を報告させていただきます。

はじめに、「小学校建設・補修事業」については、ルアンパバーン市内から悪路かつ山道を2時間ほど移動した山岳地帯にあるトンパンビライ村の小学校を視察しました。こういった山岳地帯でも日々楽しく学ぶことができるのは、CSAによって建設された小学校があるからこそであり、子供たちの笑顔を見たときにその意義を実感しました。建設から20年以上経過していることもあり、補修が必要と思われる箇所が多々ありましたので、継続した支援の必要性を感じたとともに、これからも多くの子供たちに楽しい学校生活を送ってほしいと強く願った次第です。

次に、「教育支援事業」であるサンティパープ高校寮を訪問しました。こちらは進学を希望しているが学校が遠く通えない、あるいは経済的に難しいといった学生を支援するため建設された学校寮ですが、多くの学生が学び続けられていることを確認でき、大変うれしく感じました。こちらの施設にも改善が必要な点がありましたので、ラオス教育省と連携をはかりながら改善に努めるとともに、今後も同様の施設が増やせるよう、CSAの支援継続と強化を切望します。

さて、CSAによる教育支援の効果は多々あるものの、ラオス国内における教育事情にはまだまだ課題が多く残っております。

たとえば、ラオス国内の小学校就学率は9割、かつ卒業率は8割までに低下するという実態です。理由の一つは、山岳地域が多く学校がない、あるいは遠くて通えないためとのことでしたが、この点についてはラオス国内に26校の小学校を建設したCSAの貢献は意義深いと思いますし、改善を生み出したものと感じております。

もう一つの理由は、家計が苦しく生活を維持するために就学を断念し、働かざるを得ないためとのことであり、実際に、露店や農業を手伝っている子供たちの姿を多く見かけました。この点については、教育改革および経済支援が重要となりますので、ラオス・日本両政府と教育機関への働きかけを強化していく必要があると感じました。あわせて、家計を手伝う合間に少しでも学ぶことが

できるよう、リモート教育の環境整備などもC S Aの新たな支援として企画できればと感じました。

また、高等教育への進学率も低下の一途をたどっている点も重要な課題です。

経済情勢が悪いため、学びを活かせる就職先がラオス国内に少ないこと、就職したとしても十分な対価を得られないことなどを理由に、進学をあきらめ他国へ労働に出てしまうといった悪循環が続いているそうです。ラオス国内の経済成長がはかれるよう、観光業や伝統産業（縫製、コーヒー栽培）を中心とした支援や、I T・S N Sなどを駆使してラオスの魅力を発信できる人材育成の支援を行いながら、自立的な成長を促していく必要があると思います。

また、就労で来日された方に対しては、日本の労働力不足を補えたと捉えることなく、日本で学びを活かし、母国に戻って活躍できる人材に育てることこそが本当の受け入れであると考えますので、日本人が誤った認識を持たないように留意させることも大切だと感じました。

スタディツアーでの学びを活かし、ラオスの教育環境の充実や学生たちの卒業後の未来づくりにも貢献できるよう、今後もC S Aを通じた支援に参画し続けていくことをお約束するとともに、C S Aの取り組みが広がっていくことを祈念申し上げます。この度は、ありがとうございました。



近鉄商業労働組合連合会 大西 香奈



まず、今回のツアーに参加させていただき、大変貴重な経験をさせていただきましたことに感謝申し上げます。

今回の経験で気づかされたことは、ラオスの文化や人々に触れ、実際に体感することの大切さでした。C S Aの活動については事前に理解していましたが、現地ではどのように活かされているのか、子供

たちはどのように学校生活を送っているのかを確かめることができ、CSAの支援がラオスの教育の支えとなり、必要とされていることを強く感じました。

また、ラオスの歴史を知ること支援をしていく上で重要であると理解しました。ラオスは世界で最も多く爆弾を落とされた国であり、特に郊外を中心に不発弾によって多くの人が犠牲になっていることをはじめて知りました。現在ではかなり減りましたが、年に数件は発生するそうです。郊外は貧困の家庭が多いうえに、家族を失った人や、手や足を失った人が生活することは大変な苦労があることを知りました。

さらにラオスの経済についてもその背景について理解することができました。国の市場規模が東南アジアの中でも非常に小さく、それによって海外投資が積極的に進まないことが一つの要因ということを知りました。加えて、社会主義国家であることや保守的な国民性であることも影響していると聞き、経済的な発展にはハードルがあるとも感じました。

このような背景がある中で、政府や支援団体の皆さん、そして学校の先生方がおっしゃっていたのは、教育事業を確立させることが最も重要であるということでした。子供たちに質の良い教育を行うことが将来のリーダーを育成し、国の発展につながるの思いを持って取り組まれており、CSAの教育支援がこれからも必要だとの言葉をいただきました。

私自身は一企業の労働組合の役員ですが、組合活動が遠い国の子供たちを支え、さらに国の発展にも貢献できると思うと、自分自身が今回の経験を通して知ったことや感じたことを発信し、活動の輪を広げていきたいと感じました。

最後に同行した団員のみなさん、CSAの山崎事務局長、砂長事務局次長には大変お世話になりましたことを感謝申し上げます。

シンフォニアテクノロジー労働組合 白 沢 幸 希

初めに、今回ワーキング・スタディ・ツアーに参加させて頂き、貴重な体験をさせて頂きました。CSA事務局の方々を始め、関係者の皆様には大変感謝をしております。

弊労組からはここ数年続けて参加をさせて頂いており、過去参加者からの報告を聞いて機会があれば私も参加させて頂きたいと思っていました。

ラオスについては良くも悪くも、これから大きく発展をしていく国だと思っています。その中で今後の未来を築いていく現地の子供たちに対してCSAが継続して行ってきた支援活動が力になっていることを現地訪問にて実感することが出来ました。

ラオスの市街は一見すると発展しているように見えたのですが、至るところにぶら下がっている電線、昼間から店番をさせられている子供たち、営業中の店内にも関わらず動いていないエスカレーターなど様々な面で解決していく課題があるように見えました。教育を受けた子供たちが今後社会に出て様々な分野で活躍してくれることを楽しみに思います。

ラオス訪問の中で印象に残っていることが大きく2つあります。1つ目は在ラオス日本国大使館で伺った「教育の数と質の不足」についてです。教育を賄う給料が払えず、ボランティアベースでの教育になってしまう、もしくは複数学級の授業を行っており、教育の質が上がってこないという問題があるとのことでした。ラオス語が上手く出来ない人もいる環境の中においては「教育の質」は二の次なのかもしれませんが、これから発展をしていく中で解決が必要な課題であることは間違いなく、私たちが出来ることは何かを考えさせられました。

2つ目が大人の意識についてです。サンティパーブ高校の先生方からは設備の補修について寮で暮らしている子供たちの前で依頼を受けました。運営の支援をしているNGOとはいえ、自分たちが運営、管理をしている学校設備の補修依頼を子供たちの前でするのは教育的にはどうなのかと疑問に感じました。最終日に訪問をさせて頂いたJ I L A Fの関口様からのお話にあった「自分達で新しいことをしない」という部分が出ているのかもしれませんが、支援については様々な形で行うことが出来ると思いますが、やり方によって良い面だけでなく、悪い面も顕在化してくるという事を認識し、支援活動の難しさを感じました。

最終日にはタイを訪問させて頂きました、直前までラオスに滞在していたため、空港から出てすぐに文明の発展した社会に戻ってきた感覚を受けました。しかし、タイも道を一步外れると発展に取り残されてしまったような建物や、ラオスと同じ整備されていないひどい状態の電柱があり、まだ貧富の差があることを感じました。

最後になりますが、あっという間の1週間で貴重な経験ばかりでした。ツアー期間中、快適に過ごすことが出来たのは、北野団長、山崎事務局長を始め、今回参加された皆さんのおかげと思っています。改めて感謝を申し上げると共に、C S Aの活動を今後組織内外に広め、支援活動への協力を続けていく所存です。

小林工業労働組合 中 村 健 太



本ツアー(WST)の案内をいただいた際、恥ずかしながらC S Aという組織の存在を全く知りませんでした。ラオスについても名前を聞いたことがある程度で、どんな国か、ましてやどこにあるかもよくわかっていませんでした。自身の知見を広げる良い機会と思いWSTへの参加を申請しましたが、初めての長距離渡航、初めての東南アジアということで出発が近づくにつれ、次第に不安が募っていきました。ツアー直前には、在ラオス日本国大使館から「ヴィエンチャンで強盗が発生しているため気をつけてください」と

いう注意喚起もあり、果たして無事に日本に帰国できるのだろうかと心配していました。このように不安だらけのツアー前でしたが、WSTに参加して本当に良かったと感じています。ラオスがどのような国か、どのような課題を抱えているのかを実際に見聞きし、日本とは異なる文化や価値観に触れたことで、自身の考え方の幅が広がったように感じています。

今回のツアーで特に印象に残ったのは、サンティパーブ高校卒業生との交流会でした。特に“チーム小林”で企画したゲーム「せーの」は、ツアーメンバーやチャオさん、ヌーソンさんの協力のおかげで大盛況に終わり、とてもホッとしました。この場をお借りして感謝申し上げます。楽しい交流会だったものの、正直なところ、開始前は使用する言語も文化も異なる相手とコミュニケーションを取れるか不安でした。しかし、実際に始まってみると、彼らの方から流暢な英語やスマホの翻訳機能を使って積極的に話しかけてくれたため、すぐに打ち解けることができました。話を聞くと、彼らは高校卒業後、医療分野や大手企業、行政機関などで活躍している優秀な方々でした。そ

んな彼らも、さまざまな事情から高校に通うことが難しい家庭に生まれ、C S Aの支援がなければ就学できなかったとのことでした。卒寮生から「C S Aのおかげで今の自分があるので、非常に感謝している」という言葉が強く印象に残り、C S Aの活動の意義を改めて実感しました。

ラオスでは、9年間の義務教育期間中でも、家計の事情により一定数の生徒がドロップアウトするそうです。また、親が教育の重要性を理解していない場合、子どもを就学させるよりも働かせることが優先されるケースもあります。実際、ツアー中に市場の店舗で子どもが店番をしている光景や、ホテルの前でバナナを並べて歩行者に声をかける子どもたちを見かけ、そのたびに複雑な気持ちになりました。

ラオスの教育に関する課題には、「教員の人数やスキルの不足」「地方部と都市部の教育格差」「少数民族言語の壁」などがあり、これらも急いで解決すべき課題だと感じました。また、教育以外にも「インフラ整備の遅れ」や「不発弾による被害」など、ラオスが抱える問題は多岐にわたります。今回目にしたのはラオスの実情のほんの一部かもしれませんが、私自身が学んだことを組織内で共有し、今後の活動に活かせるようにしたいと思います。

最後になりますが、C S Aの運営事務局と関係者の皆様には、このような貴重な機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。また、ツアー中大変お世話になった山崎事務局長、砂長事務局次長、北野団長をはじめとする団員のツアーメンバー、また現地でサポートしてくださったチャオさん、ヌーソンさん、小林さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。ポップカンマイ！！



小林工業労働組合 奈良 泰 七

2025年1月18日から1月25日の7泊8日の日程で、ラオスにおけるC S A活動の視察を目的としてW S T（ワーキングスタディツアー）に参加してきた。ツアーの概要は以下の通りである。1月18日の朝10時に羽田空港を出発し、タイで乗り継ぎ、夜8時頃にラオスのビエンチャン県に到着した。1月19日と20日には、関係団体の訪問やサントイパーブ高卒寮生との交流会を実施した。1月21日には、中国ラオス鉄道を利用してルアンパバーン県に向かい、1月22日と23日にはC S Aが寄贈した小学校や、C S Aが支援を行っているサントイパーブ高校の寮を訪問した。1月24日にはタイの関係団体を訪問し、その後、深夜便で日本に帰国した。1月25日には羽田空港で解散となった。自分が今回訪問した中で特に印象に残ったのは、サントイパーブ高卒寮生交流会とC S Aが寄贈した小学校の訪問であった。

1月19日の夕方にビエンチャン県内の飲食店でサントイパーブ高校卒寮生交流会が行われた。約20名の卒寮生が私たちを温かく迎えてくれ、飲食やゲームで交流を深めた。卒寮生の多くは英語が流暢であり、私の拙い英語でも親切にコミュニケーションを取ってくれた。私は隣に座った30歳の男性卒寮生と、普段の生活や仕事について詳しく話すことができた。彼はラオスで日系建築会社に勤務しており、サントイパーブ高校卒寮生がラオス国内の医療、土木建築、金融等のさまざまな分野で活躍していることを話してくれた。そして、自らの経験を通じて、C S Aの支援がどれほど

ラオス社会に貢献しているのかを熱く私に語ってくれた。彼の妹も現在サンティパーブ高校の寮に在籍しており、CSAの経済的支援にとっても感謝していると語っていた。彼女が教育を受け、将来に向けて希望を持てることがどれほど大切なことか、彼の話からはその熱意が伝わってきた。このような交流を通じて、CSAの生活支援事業がどれほど重要であるかを実感することができた。

1月25日の午後にCSAが寄贈したトンパンビライ村にある小学校を訪問した。この小学校は2002年にCSAが建設したもので、100名あまりの子供たちが盛大に迎えてくれた。CSAからプレゼントされたノート、ボールペン、サッカーボール、バレーボール、折り紙などを手に取った子供たちが目を輝かせて喜んでくれたことが非常に印象深かった。さらに、コーディネーターからの説明によれば、小学校に入学するものの、卒業できずに辞めていく子どもたちも多いという。教育環境の整備が進む一方で、教師不足や学習設備の不足が深刻な問題となっているとのことだった。特に農村部では、教育の機会を得られない子どもたちが多い現状があり、この問題はラオスの日本大使館でも懸念されているという。教育環境を整えるための支援が今後ますます求められていると感じた。子供たちとの交流を通じて、ラオスにおける教育の格差や社会的な問題について改めて考えさせられた。教育は未来を切り開くための重要な鍵であるが、十分な教育を受ける機会を得られない子どもたちが多くいることは、将来の成長に大きな影響を与える。CSAの支援は、単に物資を届けるだけでなく、子どもたちの夢や希望を支える重要な役割を果たしていることを強く実感した。

これらの訪問を通じて、CSAの活動がどれほど現地の人々にとって価値のあるものであるかを深く理解することができた。特に、サンティパーブ高卒寮生との交流は、実際に支援を受けた人々がどのように社会で活躍しているのかを知る貴重な機会となったし、CSAが寄贈した小学校やその他の支援活動を通じて、ラオスの教育環境がどのように改善されてきたのか、さらに改善が必要な点は何かを見つめ直すことができた。

最後に、今回のWS Tに参加してCSAの活動と成果、さらにはラオスの実情や問題点について、現地で実際に見聞きすることができたことは非常に貴重な経験であった。ラオスは依然として貧困が根強い国であり、CSAからの支援が今後も必要であることを再認識した。この体験を広く共有し、活動の輪が少しでも広がっていくことを願っている。

I H I 労働組合連合会 東京支部 鈴木 芳 苗

この度、2025ワーキング・スタディ・ツアーに参加できたことを心から感謝申し上げます。CS



A事務局の皆さま、そして関係者の方々には大変お世話になりました。このような貴重な機会に参加させていただき、ありがとうございました。

CSAの活動については、「救援衣類を送る運動」が主な印象でしたが、今回のツアーを通じて教育支援に関する取り組みを深く知り、その重要性を改めて認識することができました。

ラオス・タイの訪問は私にとって初めてであり、治安や食事について多少の不安を抱えながらの参加でした。しかし、ラオスの訪問

を通じて得た印象は、過ごしやすい気候や現地の方々の温かさ、美味しい食事や魅力的な観光スポットに心を打たれました。一方で、タイはラオスとは異なり、人の多さや都会的な雰囲気圧倒されました。隣国でありながらも経済成長の差が大きく、それぞれに異なる課題があることを認識しました。

ラオス訪問の際には、在ラオス日本大使館や県教育・スポーツ局を訪問し、ラオスの現状を理解したうえで学校を訪れることができました。これにより、ラオスにおける教育の現状を深く理解することができました。ラオスでは、初等教育でさえもすべての子どもが受けられる環境ではなく、CSAのような教育支援活動の重要性を再認識しました。今回、その一員として参加できたことは非常に貴重な経験となりました。

高校寮の卒寮生との交流会では、言語の壁に不安を感じていましたが、卒寮生たちは流暢に英語を話し、驚かされました。自分の片言な英語が少し恥ずかしく感じられましたが、翻訳アプリを駆使しながら会話を楽しみました。レクでは、日本で親しまれている簡単な手遊びを紹介し、楽しむことができました。ルールが伝わるか不安でしたが、サンティパープ高校の卒寮生たちは賢く、すぐに理解し、大いに盛り上がりました。いつかこのゲームがラオス中で流行する日が来るかもしれないと思いました。

CSAが寄贈した小学校を訪問した際には、校舎や教室の現状、子どもたちの姿を目の当たりにし、本活動の重要性を改めて認識しました。日本では当たり前の初等教育も、ラオスでは限られた子どもたちにしか行き届いていない現実に関心を打たれました。学校に通っていても途中で辞めてしまう子どもが多く、また多くの家庭が露天商のような仕事をしているため、子どもが家業を手伝うために学校に通わないことも多いと聞きました。実際、朝市やナイトマーケットを歩くと、小さな子どもがお店に立ち商売を手伝う光景が多く見られました。ラオスの土地柄や産業の少なさから、企業も少なく、そのような環境が形成されているとのことでした。

今回の訪問を通じて、教育問題を含めたラオスの課題を認識することができました。また同時に、これからのラオス発展に向けた期待と可能性も強く感じました。

CSAの活動を通じてラオスでの教育の重要性が改めて認識され、多くの子どもたちに教育が行き届くよう、私自身もCSAの支援活動の輪を広げていこうと強く思いました。

最後に、今回一緒に参加いただいたメンバー、現地コーディネーターの皆さん、本当にありがとうございました。今回のこの経験で、ラオスが大好きになりました！！

コプチャイライライ！ポップカンマイ！！！！





ご安全に。まずは今回のワーキング・スタディー・ツアーにあたり各種準備、運営をいただきましたC S A事務局ならびに関係者各位へ心より感謝申し上げます。

ツアーの参加前、私個人のC S Aの活動への認識はアジアで子供たちの支援活動をしている団体という程度のもので、正直なところただ日本から物資や資金を送っているのだと思っていました。しかし実際に現地を訪れ、教育支援で建てられた小学校に通う子供達と日本から持っていったサッカーボールや折り紙を使って交流をし、サンティパーブ高校寮の卒寮生と自分の拙い英語（もっと勉強しておくべきだったと後悔しました）を使って会話をするなかで、C S Aが顔の見える支援活動を長く続け、現地の教育現場や学校の卒寮生と良い関係を築いていること。それによって単なる物的支援に留まらず、国際交流の活性化にも大きく寄与しているということを改めて知ることができました。

ツアー参加を通じて特に印象深かった点が二つあります。一つはサンティパーブ高校の卒寮生との交流で見た、

「役に立つ人材になりたい」というラオスの若者の強い思いです。医者や薬剤師、弁護士を志す彼らは、いつかお金を貯めて日本にも留学してみたいと言っていました。これには自分達日本人はそれだけの信念をもって将来と向き合っているのかと身につまされる思いがしました。一方で、ルアンパバーンの街の道端では子供達が観光客にいつ売れるとも知れないバナナを無気力に売る姿があり、まだまだ教育の機会を得られず将来に希望を持たない子供達が地方には溢れ、経済格差の再生産が続いているという実情も目の当たりにしました。現実問題として一人も取りこぼすことなく支援をすることは難しいのですが、一人でも多くの子供達に前を向いて欲しい。そのためにはまだまだC S Aの活動を広げていかなければならないということを強く感じました。この思いを自組織でもしっかりと伝えていきたいと思います。

印象深かった点もう一つは、J I L A Fの関口さんがおっしゃっていた、「支援をするにあたっては自分達で考えさせることが必要」という言葉です。J I L A Fではコーヒー豆の栽培の支援を行っており、支援の最初に「品質で選り分けをしていない豆」で挽いたコーヒーと、「品質の良い豆」を選んで挽いたコーヒーを飲み比べさせ、味が大きく変わることを、それが価値を生むことを伝え、自分達でよく売れる豆について考えさせているとのことでした。一方的に与え依存させるので

はなく、自助努力と相互扶助を自分達で作ることを支援の最終目的として活動しているとも伺いました。自立し自ら努力することを惜しまないこと、困ったときにはお互いに手を取り合うこと。これらは考えてみると私たち労働組合の活動の原点でもあります。私たちの日々の組合活動も、国際貢献や支援活動も根本的には同じなのだとすることを再度認識できたことで、CSAやJILAFの活動をより一層身近に感じられたことは、今回のツアーで得た一番の成果だと思います。

最後になりますが、この8日間の貴重な体験をともに共有し、多くの学びを得られたのは、北野団長、山崎事務局長、砂長事務局次長はじめ訪問団メンバー各位の多大なるご尽力、ご協力によるものです。この場を借りて改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

ご安全に。

アジア連帯委員会 事務局次長 砂 長 勉

先ずは、様々な組織から参加いただいたメンバーと共に貴重な経験ができた事、多くのことを語り合えた事に感謝申し上げます。

ワーキング・スタディ・ツアーは、CSAが結成された1981年より活動を開始して以降、視察団の名称は違うことはありましたが、CSAの活動を支えていただいている労働組合の皆様方に、現地での活動を確認いただく事、そして視察内容を組合内で共有を図り今後の支援活動に活かすことを目的の一つとしています。



今回のツアーにおいても、CSAが建設した小学校の訪問、支援をしているサンティパーブ高校生寮の訪問により、「学校建設補修事業」「物資支援事業」「教育支援事業」の現状を見ていただくことができました。今回訪問したトンパンビライ村の小学校は2011年に訪問して以来、13年ぶりの訪問となります。校舎は老朽化していますが、通っている子供たちは元気です。ノートとボールペンをプレゼントし、言葉は通じませんがサッカーや折り紙で交流を図りました。キラキラした子供たちの目が忘れられません。いずれこの子供たちが大きくなりラオスを少しでも変えてくれることを期待せずにはいられませんでした。

また、サンティパーブ高校生寮の訪問と卒業生との交流会では、CSAの支援により学ぶ機会を得られ感謝している事が伝わる歓迎を受けました。寮生たちが自分の夢に向かって勉強に励み、そして卒業生は社会人として重要な役割を担っている姿をみて、自分たちの活動がラオスの将来に確実に貢献していることを感じ取ることができました。

ワーキング・スタディ・ツアーにもう一つの目的があります。それは、現地の状況を把握し今後の事業運営の為の情報収集を行うことです。

今回も、現地の先生や生徒、ラオス教育・スポーツ局、在ラオス・タイ日本国大使館、AAR、JILAF等、多くの皆様のご協力を得て意見交換する場を設けていただきました。

両大使館や他のNGO組織からは、ラオスの現状や今後の支援の在り方など多くのご意見をいただき、ラオスの課題や今後の活動の方向性が見えたように感じます。

ラオスの教育事情は、教員の絶対数や資質不足、地方部と都市部の格差、民族間の言葉の壁、教育分野における国家予算不足等々、長年課題とされているが解決がなされないことが数多くあり、今後の支援の在り方を考える参考になりました。

また、小学校の先生からは「幼稚園の建設」、寮生からは「ネット環境の問題解決」「排水設備の問題解決」等、多くの要望をいただきました。しかし、すべてがC S Aとして取り組める内容ではありません。C S A、ラオス政府、各県の教育スポーツ局等、どこがどのようにできるのかを今後精査して進めていかねばならないと考えています。



昨年11月にアジア連帯委員会事務局次長に就任し、これからどのような活動を進めるべきなのかを確認できた有意義なワーキング・スタディ・ツアーになったと考えています。

今回は、山崎事務局長との二人三脚で進めたワーキング・スタディ・ツアーでしたが、次年度からは一人で担っていかねばならない大変さを痛感しておりますが、今後も支援をいただいている多くの組織のご協力を得ながら活動を進めてまいります。